

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00483

研究課題名(和文) フランス中世写本における欠損部分の研究 とくにオック語文献について

研究課題名(英文) Study of the missing part of the medieval occitan manuscripts

研究代表者

瀬戸 直彦 (Seto, Naohiko)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：30206643

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：中世オック語作品の写本における欠損部分の研究を、13世紀の南仏の物語『フラメンカ』を題材に行った。聖職者であろう不詳の作者による作品は唯一写本に残されているが、冒頭と末尾の数葉が脱落しており、途中においても当時としてはショッキングな描写が数行削られ、さらに作中のラブレターが消失している。それらの欠損の意味を探ろうと試みた。そしてそれらの欠損の原因となつたらしい「心性」を主として羞恥心の観点から迫ろうとした。

また、最近の語彙研究から、物語の作者に擬せられることもある聖職者ダウデ・デ・プラダスの作品について作者の恋愛観をよく示す一作品を、C写本から校訂して解釈をほどこしてみた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代において中世フランスのテキストに接する場合は、伝承媒体である写本を校訂して活字におこしたものを利用することになる。しかし、写本のマテリアルな状況はその場合、等閑に付されてしまう。南仏の物語『フラメンカ』を題材に、写本のさまざまな欠損を検討し、合わせてダウデ・デ・プラダスの抒情詩を校訂・分析することで、この物語の「心性」を体現しているであろうトルバドゥールの恋愛詩の本質に迫ることができたかと思う。そして、写本の欠損がけって偶然によるものではなく、作品伝承の過程での種々の操作により生じたものであることを多少とも明らかにできたかと思う。

研究成果の概要(英文)：Our investigation concerned the 'parties perdues' of the manuscripts in the mediaeval occitan literature, especially in the Roman de Flamenca (1234?). The missing feuilles and lines erased in the manuscript 'unicum' (Carcassonne, Bibliothequ municipale 34) represent, in a sense, the 'mentality' of the troubadours poetry: 'pudeur medievale'. The troubadour Daude de Pradas (13 century, 19 chansons contained in the chansonniers) is assimilated to the author of this roman in the lexicographic study of Jean-Pierre Chambon (Sorbonne University). I edited and analysed one of his chanson (Amors m'envida em somon), based on the ms. C, extraordinary song which divide l'object of chansons in three: dame (midons), piucella (pucelle) and soudadieira. This concept of love partner in the poem correspond, in one sense, to the love atmosphere (pudeur) of Flamenca.

研究分野：中世フランス文学

キーワード：写本 トルバドゥール テキストの欠損 作品校訂 物語 ダウデ・デ・プラダス

1 研究開始当初の背景

これまで私は中世フランス語(オイル語)、南仏語(オック語)による写本をもとに、とくにトルバドゥールと呼ばれる11 - 13世紀の南仏の抒情詩人の作品をいかに校訂すべきかという問題にとりくんできた。従来よく見られる方法、つまり19世紀から20世紀末までの研究者によって収録写本の「読み」から、できるだけ「オリジナル」に近いテキストを推定する方法(ラハマン法)、あるいは底本を選択して、それに記された「読み」をできる限り尊重する方法(ベディエによる一写本優先主義)のいずれが適当であるかを検討するだけではない(私自身は後者の方法がトルバドゥールの作品については適当だと考えている)。その作品が、どのような写本に、いかなる形(作者や作品の収録順序・写字生の癖など)で記されてきたかという、一種の「外的な批判」critique externeを考慮に入れて作品校訂・解釈にとりかかるという立場である。

このような方法論は19世紀の末に、ドイツのグスタフ・グレーバーのとなえたものだが、その後ほとんど顧みられることがなかった。私は1987年パリ第4大学に提出した第3課程博士論文において、フォルケ・ド・マルセイユ(12世紀後半から1231年)というトルバドゥールの作品を、Cと名づけられる13世紀末から14世紀初頭に記された写本(Bnf. fr. 856)を底本にして校訂してみた。この詩人はのちにシトー会の修道士となり、聖ドミニコを庇護しトゥールーズの司教にまで上りつめた人である。C写本は1200以上の抒情詩を収録する浩瀚な写本であるが、さまざまな点で興味深い。ところどころ後の読者によるミニアチュールが切除されていること。「この作品はプロヴァンス伯の追悼歌のメロディーで歌う」といったたぐいの15世紀以前の手による書きくわえがある。私は写本のこのような独自の部分を重視し、また写字生が写本の冒頭にその17作品を、いかなる順序で配置したかを考慮しつつ、写字生(あるいはその注文主)はフォルケという詩人を冒頭に収録することで写本に一種の「箔」をつけようとしたのではないかと論じた。またこのC写本のテキスト(読み)は「オリジナル」を改変し読みやすくした部分が見られる。その形跡を他の写本の読みと比較し、この写本の独自性を追求してみた。

1990年代末より、主としてイタリアでグレーバーの「外的批判」を体現したようなIntabulareという研究叢書が発刊され、トルバドゥール、トルヴェール(北フランスの抒情詩人)、スペイン北部の詩人たちの各写本を網羅的に記述しようとする試みが現れてきた。収録作品の内容の校訂(「内的批判」critique interne)ではなく、各写本がどの詩人をどのように収録したかのカタログといってよい。グレーバーの問題提起から1世紀以上を経て、ようやく写本のマテリアルな側面をテキスト校訂・解釈にとり入れる機運が育ってきたと思われる。

私は近年、とくに作者不詳の『フラメンカ』というオック語で13世紀中葉から後半にしるされた8000行におよぶ物語に注目している。トルバドゥールたちの歌った既婚の貴婦人への恋愛というモチーフをたくみに物語化した作品である。ところが、この作品はカルカッソンヌ市立図書館本(cote: Ms 35)でしか伝えられていない。しかも冒頭・結末が欠けており、内部の欠損もみられる。以前より研究してきたトルバドゥールのC写本の欠損と考え合わせると、私はこの写本テキストの中にみられる「不在」という現象をよりシステムティックに考察してみるべきではないかと思うにいたった。

2 研究の目的

まずは『フラメンカ』の唯一の写本133葉の表に記されている部分に注目してみたい。ヒロインである人妻フラメンカと青年騎士ギヨームが、フラメンカの夫アルシャンボーがたまたま

留守にしたのを幸いにして「快樂の限りをつくす」(7647行)場面である。ところが7648-49行が削り取られているのである。19世紀に初めてポール・メイエルが校訂版を出した時点、1864年にはすでに削られていて、彼はこの欠損について、「この写本の昔の読者がショックを受けて未梢したのだ」と述べている。1901年の改定版ではメイエルはここに薬品をかけて少し読めるようにしたという。1976年の校訂者はメイエルが薬品を不用意にかけたのでかえって読めなくなってしまった愚痴をこぼしている。2008年のロベルタ・マネッティによる浩瀚な校訂版、ならびに2014年の最新の校訂版(フランソワ・ズフレによる)では紫外線ランプを使って復元できたという。復元されたのは「長衣(プリオ)も肌着(シュミーズ)もかれらの喜びには全然邪魔にならなかった」というテキストである。

これは一見、写本の読みの復元にすぎないように見えるが、pudeur「羞恥心」の変遷から見ると13世紀の作者のオリジナルでは問題にならなかった情事の一部が、かなり赤裸々に描写されている。これは中世文学ではファブリオーの猥雑な笑いをさそう記述をのぞいては稀な現象だと思われる。テキストの一享受者の道徳観を刺激したのであろう、その後削り取られ、さらに薬品をかけて読み解こうとするなど試行錯誤のうえに、現代の読者に供されるようになったのである。

この写本ではヒロインから青年騎士への恋文を、それとせず夫のアルシャンポーが妻に読みあげる一節があるが、肝心のその手紙の部分も写本から剥ぎとられている。恋人への書簡集に興味をもったある読者がその部分を切除したに違いない。この物語の写本は一つだけであるが、2713-20行(愛に関する格言)だけがカタロニアの一写本(格言集)に入っていることが1985年に明らかにされている。作品の一部をとって別のコンテキストで享受するという形があったに違いない。実用に供したのであろうか。

3 研究の方法

上記したように、テキスト内の「不在」の研究は、作品の受容史ばかりか校訂の方法にまで関係する。この研究課題においては、対象をつぎのように定めた。

1) メロディーを付しているトルバドゥールのR写本(Bnf. fr. 22543)において、ネウマ譜が4線のみ記され肝心の記譜記号は不在である場合のように、最初から何らかの事情で記されなかった場合。

2) (1)において述べたC写本のように後世における受容と毀損が大きい場合。たとえばミニチュールの切除(その裏に記されたテキストも亡失してしまった)。またテキスト自体の改変(主として写字生による)。

これらは従来より研究してきたトルバドゥールの各写本、とくにC, R, N写本(写本欄外への挿絵がある)において考察してみたが、R写本については研究が及ばなかった。N写本については前回の課題で準備作業を行ったが具体的には進まなかった。つぎに、

3) 現在われわれが写本のテキストを読み解釈するさいの方法論とテキスト設定(校訂)の方法の構築。

これは、『フラメンカ』という(2)において述べた作品の唯一のカルカッソンヌ写本をより網羅的に研究することによって進める。各所に見られる字句の訂正、そして後世における受容の総合的な研究である。羞恥心による切除、研究者(ポール・メイエル)による善意の毀損も含めた受容史である。この部分は2020年夏にイタリアのトリノ大学で開催される予定の第12回「国際オック語オック文学研究学会(AIEO)」において発表する予定であったが、コロナウイ

ルスの蔓延により学会が中止されてしまったのが残念である。

4 研究成果

今回の研究課題では、オック語写本の欠損部分の研究から、オック語の物語におけるテキストの構成の妙とトルバドゥール詩におけるダウデ・デ・プラダスの抒情詩の解釈に進展した。コロナ禍により、予定していたトリノ大学での「第12回国際オック語オック文学研究学会AIEO」での研究発表がかなわず、パリの高等実習研究院 EPHE のファビオ・ジネリ教授の招聘もできなかった。これらは残念ではあったが、成果としては以下のものを掲げておきたい。

(1) 『フラメンカ』

テキストの欠損という観点から見てもひじょうに興味深いこの『フラメンカ』という物語の作者は不明であるが、教会のなかでの行事などに詳しく、司祭とその助祭が重要な役割を担うところから、おそらくは聖職者であろうと推測されている。

2018年度に執筆した論文「太陽が恥じらうかのように赤く昇ると 中世南仏の物語『フラメンカ』をめぐって」においては、この作品についての19世紀以来の研究史をたどってみた。内容の複雑さと欠損部分の多さ、語彙の難解さによりこの作品はかなりの難物である。1864年のポール・メイエルによる初の全体の校訂、それへのカミーユ・シャパノーの書評、それを受けてのメイエルによる1901年の第2版の第1巻(テキストと語彙集を含む。解説と解釈を含む第2巻は未刊行)が、その後100年にわたって権威を保ってきた。メイエル本がこの作品を論ずる場合の底本とされてきたこと、そしてようやく、21世紀に入って、イタリアのロベルタ・マネッティ(2008年)とフランソワ・ズユフレ、ヴァレリ・ファッスール(2014年)による新版が出たこと、それらの特徴を記しておいた。また、この作品の空前絶後の構成のユニークさを指摘し、現存写本のもつマテリアルな問題のはらむ魅力についても付言しておいた。

(2) ダウデ・デ・プラダス

同じような当時の心性(マンタリテ)を表現したトルバドゥールに、ダウデ・デ・プラダス(13世紀初頭に19篇あまりの作品を残したルエルグ地方の聖職者だったとされる)という人がいる。1933年にアレクサンダー・シュッツが校訂版を上梓し、2015年にはイタリアのシルヴィオ・メラニが新しい校訂を刊行している。メラニの仕事にたいして、ジャン・ピエール・シャンボンとドミニク・ビーの二人が、辛口の、しかし大変有益な書評をものしている(ともに *Revue de linguistique romane*, 2017, 2018年)。私は、それらを参照しながら、ダウデの作品のなかでとくに「愛が私を誘い 命じるのだ」で始まる一編に興味をもち、上述したC写本をもとに校訂して解釈をほどこしてみた。収録20写本のうちで、メラニはaという写本を底本にして校訂している。Cのテキストは、詩節の順序が他の写本と異なり、独自の読みを含む。

いったいにトルバドゥールの恋愛は、1人称体の語り手がひたすら既婚のダーム(パトロンとしての貴族・領主夫人)に恋焦がれるものの、その愛は報われることがない、その状況への恨みつらみを歌った千篇一律の内容がかれらの歌 *canso* であると言われている。しかし、ダウデ・デ・プラダスのこの作品をみると、じっさいはそのようなきれいごとではなかったことがわかるのである。この一種の「教訓詩」は、何か恬淡とした調子で、憧れのダーム *dompna, midons*

への愛はプラトニックなものでも構わないが、語り手である自分の欲望は「若い娘」*puçella tozeta* と「商売女」*soudadieira*を相手に処理すればいいという驚くべき忠告である。若い娘への言い寄りは、パストレッラ（パストレル、牧歌）と呼ばれるマイナーなジャンルの作品に現れているが、抒情詩にはめったに登場せず、まして商売女が出てくる例はほかにはないと思われる。

いみじくも、ジャン=ピエール・シャンボン（パリ・ソルボン元名誉教授）は、『フラメンカ』の語彙とダウデ・デ・ブラダスの語彙を比較検討して、レクシコロジー（語彙学）の立場から、物語の作者はダウデ・デ・ブラダスなのではないか、という主張を最近展開している。

羞恥心によるテキストの切除という当初掲げた問題にはまだ踏み込む余裕がなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 瀬戸直彦	4. 巻 66
2. 論文標題 ダウデ・デ・ブラダスの「教訓詩」(PC 124, 2)について tozetaという単語の意味ー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 271-290
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Naohiko Seto	4. 巻 1
2. 論文標題 Note complementaire sur l'emploi du terme "assassin" en ancien francais et ancien occitan	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Lectures de comparatiste : Quatre millenaires de litterature mondiale. Etudes offertes a Roy Rosenstein	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 瀬戸直彦	4. 巻 29
2. 論文標題 ギラウト・リキエルのパストゥレルに流れる「メタ文脈」ー第5唄(PC 248, 22)を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Etudes Francaises 早稲田フランス語フランス文学論集	6. 最初と最後の頁 23-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 瀬戸直彦	4. 巻 64
2. 論文標題 太陽が恥じらうかのように赤く昇るとー中世南仏の物語『フラメンカ』をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 203-218
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------